

國學院大學學術情報リポジトリ

2019年度国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-14 キーワード (Ja): NDC8:121.52, 国学 コクガク キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001624

国学、実学、朝鮮学

——学術運動としての韓国「国学」研究の動向と展望

裴 寛紋 (ベ カンムン)
KAIST 招聘教授

1、はじめに——研究の立場

18世紀後半、一般に国学を大成したといわれる本居宣長は、近代的な日本文献学の先駆をなすと意義づけられてきた。そのことは、とりわけ宣長の主著『古事記伝』に見られる綿密な注釈作業によった評価である。ところが、実際『古事記伝』に即して見ると、それは単なる注釈書というより、宣長が近世において創り出した新たな神話であるといえる。

小著『宣長はどのような日本を想像したか——『古事記伝』の「皇国」』の問題意識はそこにあった。まずは国学から国文学への延長線上に宣長を置くことから離れ、彼の問題は彼の時代の問題（近世神話）¹として捉えようとしたのである。『古事記伝』の創った「皇国」の物語というのはその結果であり、近代日本における「皇国」思想とは一線を画していることに留意したい。小著の冒頭に述べたことだが、

国文学が「国民の学」を担う際に、国文学者は国学との連続性をことさら強調した。すなわち、近代以前に既にあった国民的自覚として国学を位置づけ、そのような国学を継承しているのが国文学であると標榜した。(中略)近代日本において国文学が国文学という伝統を背負って誕生するところに、近代的学問としての宣長「学」の発見もある²。

と、再考すべきは、むしろ宣長「学」の方法を近代学問の伝統として受け入れようとした国文学の方ではないか、としたのである。そして、今後の課題について「あとがき」で次のように書いていた。

¹ 『古事記伝』を「近世神話」として読む試みとして、斎藤英喜「近世神話としての『古事記伝』——「産巢日神」をめぐる」(『文学部論集』94号、佛教大学文学部、2010)、同「宣長・アマテラス・天文学——近世神話としての『古事記伝』のために」(『歴史学部論集』1号、佛教大学、2011)、山下久夫「「近世神話」から見た『古事記伝』注釈の方法」(鈴木健一編『江戸の「知」——近世注釈の世界』森話社、2010)、同「本居宣長と平田篤胤は神道をいかに再構築したか」(『現代思想』45巻2号、2017)などを参照。

² 裴寛紋『宣長はどのような日本を想像したか——『古事記伝』の「皇国」』(笠間書院、2017)「はじめに」、2頁。

韓国の学界において宣長を語ることは、もっと難しい。自分にとって宣長を読むことが常に今まで勉強してきたことを解体することであったように、朝鮮国学といわれている思想家たちと格闘することを自己批判として続けていきたい³。

当時、筆者の念頭に置いていたのは、植民地時代の朝鮮で古典研究に努めていた人々であった。ここで「朝鮮国学」と書いたが、厳密に言えば、それは一般的な学術用語ではない。そこから始めてみよう。

2、1930年代の学術運動としての朝鮮学——研究の現況

韓国において日本の「国学」にあたるものは、1930年代の植民地朝鮮で盛んであった「朝鮮学」というべきであろう。それはもちろん、江戸時代中期に興った日本の「国学」とは、時代的にも思想的にも同一なものではない。たとえば、本居宣長が和歌や物語から発見した「もののあわれ（を知る）」といった概念に代表されているように、朝鮮において「国語」のハンゲルで書かれた文献の中から固有の文化や独自の民族精神を求めようとする学問の傾向は、1945年以前には見出しがたい。ただ、主に18世紀ごろに著された漢文の文献から「西欧近代の可能性」を探ろうとする向きはあった。それが「朝鮮学運動」である。研究者によっては1930年代の韓国における「国学的学知」と定義されたりもしているが⁴、本稿では、韓国の「国学」と呼ぶことにする。

朝鮮学運動を導いていた人物の中でよく知られているのは、チョンインボ 鄭寅普・アンジェホン 安在鴻・ムンイルピョン 文一平らである。そのうち鄭寅普は、朝鮮学運動の一環として新朝鮮社の出版活動に力を入れて近代学術の土台を作り上げたが、当時、「国学」という用語を初めて用いた人でもあった。彼のいう「国学」には、18世紀後半に古代日本への回帰を追求した日本の「国学」と、19世紀後半に西洋を意識して中国で興った「国学」が多分に錯綜している。と同時に、国権を失っていた朝鮮民族の精神的な支えとして機能するために、自己認識の思想を強く持ち出されている。1945年の解放後、彼は「国学大学」⁵設立に関与するのだが、それもやはり「国学」に対する強い理念に基づいたことであろう。

先にも述べた通り、韓国学界において、近代的な意味でのネイション・ステイト（国民国家）を学問的に支える「国学」として位置づけたのは、「朝鮮学運動」であった。「朝鮮学」に「運動」の付いている理由は、その学問が植民地朝鮮における民族独立運動とかかわっているためである。すなわち、朝鮮学運動は、1927年に結成した抗日団体である「新幹会」⁶

³ 前掲書、254頁。

⁴ 姜海守『植民地「朝鮮」における〈国学的学知〉の形成——「朝鮮儒教」・「朝鮮学」・「国文学史」の成立を中心として』（立命館大学大学院文学研究科博士論文、2000）。

⁵ 1946年に国学専門学校としてソウルに開校（当時の設置学科は文学科と史学科）、1947年に国学大学と昇格。初代総長に就任した鄭寅普は実質的な設立者であった。1967年に友石大学校に統合、さらに1971年には高麗大学校に吸収された。

⁶ 新幹会は、左翼と右翼の合作により創立した抗日団体として「民族唯一堂、民族共同戦線」をモットーに独立運動を展開した。しかし、そもそも合法団体であった新幹会は、闘争的な綱領を掲げたわりには、積極的な活動はできない弱点があった。元山労働運動を支援したり光州学生事件の調査

の解散運動と深く連動している。

朝鮮学運動の中心は、何といたっても、18世紀後半の「実学者」^{チョンヤギョン}丁若鏞（号は茶山、^{ダサン}與猶堂^{ヨユダン}）に光を当てることであった。それまで写本しか伝来しなかった丁若鏞の膨大な著述を集めて公刊することは、朝鮮学の出発を知らしめる象徴的な事業であった。1933年から計画した出版事業は、『與猶堂全書』全154巻76冊（新朝鮮社、1934～38）⁷として結実した。ちょうど1936年には丁若鏞逝去百周年に合わせた茶山記念事業も活発に展開された。目指すところは、丁若鏞の学問的成果の刊行により、そこに内包されているはずの西欧近代の可能性を見つけること。それが実現したならば、自主的近代化に成功して、今のような植民地になることはなかっただろう、といった期待が、彼らの研究に反映している。朝鮮学運動に含まれている考え方は、1945年以降、「内在的発展論」という形で受け継がれ、現在にいたっている。韓国において植民地時代研究は、1990年代までも、民族独立運動史の観点によって進められていたため、本格的な意味での学術史研究は、2000年前後まで待たなければならない。

朝鮮学をめぐる研究の方向性を学術史的な接近に変えた嚆矢といわれているのは、国史学者の辛珠柏^{シンジュベク}、そして国文学者の林熒澤^{イムヒョンテク}である。辛珠柏の研究は、朝鮮学を学術的にアプローチする必要性を唱えたものである。彼は「朝鮮学の学術場」という用語を通じて、朝鮮学の参加者を民族主義者のみならず、社会主義者、「京城帝国大学」⁸を卒業した朝鮮人、さらに日本の知識人までに範囲を広げた⁹。一方、林熒澤の研究は、朝鮮学運動の核心というべき18世紀の知識人への注目、すなわち「実学」の発見を、1910年以前の「国学」との連続性の上で検討したものである¹⁰。

「実学」とは、韓国の学界で用いられている独特の概念語である。およそ18世紀半ばに登場し始めた西洋科学への関心、自国の領土や歴史に対する関心、経済観念の出現に注目し、それを「自発的近代化」への萌芽とみる研究を指している。林熒澤は、20世紀の初め、日韓併合の直前に朝鮮の知識人が現実の危機状況を打開するため、「実用」の目的から「実学」を拠り所にしてきたのに対し、1930年代の知識人は、それを学問的な研究対象にしたことを指摘している。これこそ、韓国学における「国学」という概念の誕生、及びその継承と変容を明らかにした研究であった。彼は朝鮮学運動の出現の背景として、帝国日本の学問的支配に対する危機意識、新幹会の解散による民族的力量の新しい出口への

団を派遣したりするなどの活動を見せたが、総督府の弾圧が強まった上、民族主義者と社会主義者の内部分裂により、1931年に解散した。

⁷ 『與猶堂全書』刊行から77年になる2012年、丁若鏞誕生250周年記念として、『定本與猶堂全書』全37巻が茶山学術文化財団により刊行された。『定本與猶堂全書』は、『與猶堂全書』における誤植を訂正するほか、丁若鏞の真の著作でないものを除外し、新出著作などを増補した決定版である。

⁸ 1924年、日本統治下の朝鮮に設立された旧制大学。1919年の三・一独立運動後、私立大学設立の機運が高まると、朝鮮総督府では、その動きを制するために官立大学設置を急がれた。早く京城帝大の学知に注目した研究として、朴光賢『京城帝国大学と「朝鮮学」』（名古屋大学大学院人間情報学研究科博士論文、2002）を参照。

⁹ 辛珠柏「朝鮮学の学術場の再構成」（同『韓国近現代の人文の制度化——1910～1959』ソウル：慧眼、2014）。

¹⁰ 林熒澤「国学の成立過程と実学に対する認識」（同『実事求是の韓国学』ソウル：創批、2000）。

模索、京城帝大の設立といった三つの要因をあげている。時代によって変化する「実学」の意義を鮮やかに見通した彼の研究は、朝鮮学術史研究の次世代に向けて思考の転回を可能にしたといえる。

やがて韓国学界においても国民国家をめぐる言説に対する厳しい批判があり、国民国家を単位とする一国史観からの脱皮を唱え始めた。朝鮮学研究は、民族独立運動の性格から離れ、朝鮮学そのものに対する考察を深めるようになる。また、東アジア論の流行に伴い、同時代の日本・中国の「国学」をも視野に入れて朝鮮学を考えようとする動きも現れている。

柳^{リュジュンピル} 浚^ソ 弼^{ビル}は、東アジアにおける近代学問の起源として大学という制度に着目し、京城帝大について詳らかに検討している。その前提になる作業として彼が調べたのは、東京大学（1877年に設立）と京師大学堂（1898年に設立、1912年に北京大学と改称）の学制である。つまり、東アジアにおける初期アカデミズムの成立の歴史を、大学制度の移植及び変容という観点から捉え直したのである。彼の問題提起は、従来の独立運動史では全面的に扱われてこなかった京城帝大の学知、そして日本人教授たちの学問に対して客観的な評価が必要であることを喚起させた¹¹。彼の研究を踏まえて、朝鮮学の学術の場をより拡張し、また仔細にわたって具体化させたのは、鄭^{チョンソンヒョン} 鍾^{ソン} 賢^{ヒョン}である¹²。その上、張^{チャンムンソク} 紋^{ムン} 碩^{ソク}の研究は、朝鮮学運動をリードした新朝鮮社の出版目録を綿密に調べて整理している¹³。今まで朝鮮学運動のスローガンにだけ研究の焦点があてられてきたが、そこで実際に何をしたか、またその具体的な成果を徹底分析しているのである。最近の朝鮮学研究は、朝鮮学運動に重点を置く研究でも、もはや民族主義者系列に対象を限定することはできず、鄭^{チョン} 寅^{ムン} 普^{ボム}・安^{アン} 在^イ 鴻^{ホン}・文^{ムン} 一^{イル} 平^{ピョン}らの差異を前提にして論じるようになってきている¹⁴。こうしてみると、朝鮮学研究は、独立運動史の中の叙述から、学術的な接近へと、確実に中心が変わってきたといえよう。

前述の林^{リン} 熒^{ビョク} 澤^{タク}は、かつて中国の「国学」と朝鮮学とが相似ていることを指摘している。近年、宮嶋博史は、日本の「国学」と朝鮮学との比較研究を試みており、朝鮮学の研究において宗教性の問題はほとんど言及されることがないと強調している¹⁵。それらを踏まえた最近の研究として、日本・中国の「国学」と朝鮮学との関係を強調している李^イ 鎔^{ヨン} 範^{ボン}は、「植民地国学」という新しい用語を提案しながら、朝鮮学に積極的な意味を与えようとしている¹⁶。

¹¹ 柳浚弼「植民地アカデミズムと「朝鮮文学史」認識の地政学的意味——京城帝大の漢文学研究」（林熒澤編『韓国学の学術史的展望』2、ソウル：ソミョン出版、2014）。

¹² 鄭鍾賢「申南徹と「大学」制度の内と外——植民地「学知」の連続と非連続」（林熒澤編、前掲書）。

¹³ 張紋碩「植民地の出版と両班——1930年代、新朝鮮社の古文書出版活動と伝統知識の植民地公共性」（『民族文学史研究』55号、民族文学史学会・民族文学史研究所、2014）。

¹⁴ 民世安在鴻先生記念事業会編『1930年代における朝鮮学運動の深層研究』（ソウル：ソニン、2015）。

¹⁵ 宮嶋博史「日本の国学と韓国の「朝鮮学」——比較のための序論的考察」（『東方学誌』143号、延世大学校国学研究院、2008）。

¹⁶ 李鎔範「「植民地国学」と植民地的総体性の逆説」（『民族文学史研究』62号、民族文学史学会・民族文学史研究所、2016）。なお、以上の研究動向については、李鎔範『金台俊の思想資源と学術実践』（成均館大学校東アジア学術院東アジア学科博士論文、2019）7～10頁を参考にしてまとめたのであり、氏からご教示いただいたことを断っておく。

「植民地国学」とは、学術とメディア、学術と国家、そして大衆（国民）とメディアの関係をめぐって、植民地であるゆえに矛盾を抱えるしかなかった「国学」の様態をあらわにした用語である。そもそも大衆メディアにしか発表の機会をもたなかった1920年代に比べ¹⁷、1930年代の新世代知識人は、朝鮮語文学会の『朝鮮語文学会報』（1931年創刊）や震檀学会の『震檀学报』（1934年創刊）など、ある程度学術性・専門性を保っている雑誌を舞台に活動することができた。しかし、「植民地アカデミズム」と命名される、このアカデミアは、民間レベルの学術の非科学性を批判しながら高水準のアカデミズムを目指したとはいえ、制度圏内に入ることはできるはずがなかった。時を同じくして現れた京城帝大という近代アカデミズムは、そこで行われる朝鮮語文学及び朝鮮史講座、さらに朝鮮人卒業生の輩出により、次第にその存在感を増していたからである。

国家不在の植民地の知識人は、植民地政府の帝国大学がもっている権威を意識せざるを得なかった。しかも政府の後援はアカデミズムの人的構成に留まらず、一次資料の刊行といった物的な面にも及んでいた。たとえば、朝鮮学において最も見解の相違が大きく激しい論戦が起きた檀君神話の場合でも、その出典となる文献『三国遺事』の公刊は日本内地で先になされたのである¹⁸。また、1925年に発足した総督府直轄の朝鮮史編修会は、1937年まで、約97万円の巨額を投じて、『朝鮮史』35編、『史料叢刊』102編、『史料複本』1623編を編纂した。この期間に朝鮮史編修会の行った情報収集は、朝鮮全国と津島及び満州に至るまで、計4950件の成果を上げている¹⁹。その政治的意図は置くにしても、近代的な学術の場を提供したのは、このような政府主導の学術事業、いわゆる「植民地官学」の影響力という一面を看過しがたい。

「植民地国学」をはじめとする「国学」という用語の有効性はともあれ、東アジアを見据えた上で、各国の「国学」を比較することにより、「国学」の普遍的性格や現代的意義は新たに浮き彫りにされたといえよう。

以上、韓国学界でなされてきた「国学」研究、主に1930年代に学術運動としてあった「朝鮮学運動」研究の流れを見てきた。そこにおいて20世紀の韓国「国学」は、18世紀後半の「実学」と欠かせない関係のなかにあること、つまり、「実学」研究の基盤を整えたのが他ならぬ「国学」であるという事実を確かめた。ここからは「実学」研究を経由し、それをバネとして論じられている21世紀の「国学」研究について見ていきたい。

3、「実学」の発見とかかわって——研究の問題点

朝鮮時代後期、とくに18世紀の英祖・正祖の時代、「実学派」と呼ばれる学者たちは、

¹⁷ 『朝鮮日報』（1920年3月5日創刊）、『東亜日報』（1920年4月1日創刊）、雑誌『開闢』（1920年6月創刊）など、1920年代は植民地時代において最も多様な大衆雑誌の発刊が活発に行われた時期である。

¹⁸ 『三国遺事』の活字本は1905年に東京帝大文科大学の史志叢書シリーズとして、影印本は1925年に京都帝大で刊行された。それを日本留学中であった崔南善が朝鮮にもってきて、自らの校訂を加え、啓明倶楽部の機関誌『啓明』18号に『三国遺事』の全文を載せたのは、1927年のことである。参照、高雲基『徳川の愛した本』（ソウル：玄岩社、2009）。

¹⁹ 朝鮮総督府朝鮮史編修会編『朝鮮史編修会事業概要』（ソウル：シイン社、1985〔1938〕）、76～79頁。

西洋学術（西学）の伝来により、中華的世界観を乗り越え、自国中心な新しい世界観を立てようとする。彼らの学問の方法は、現実的・実用的・合理的・実証的・批判的な性格をもつようになる。こうした学風は、やがて庶民階層の覚醒や自覚にもつながっていく。この時期の学問の特徴として、官僚中心から個人の学者中心への変化、学問分野の専門化、人民の現実問題及びその解決策への関心などがあげられる。

上のような、現在の「実学」概念が固定したのは、少なくとも1960年以降といわれている。その言説は解放後の北朝鮮・韓国の学界において急速に成長した。北朝鮮・韓国ともに実学研究が盛んになったが、ここでは韓国の学界に限ってみる。1970年代の李佑成イウソンや千寛宇チョンクァヌの研究がその典型である²⁰。実学研究を支えた両軸は、「民族」―「近代」であった。言い換えれば、その反対側にある「中世」―「朱子学」は、否定すべき対象として意識された。実学は単独で存在するわけではなく、あくまで「民族」―「近代」の図式のなかで理念化したのである。

1945年以降の本格的な研究により、実学は一つの「学風」ではなく、確然たる「学問」として定着した。そして、実学をめぐる知識の専門化と大衆化が同時に進められてきた。20世紀の韓国は、学界の専門知識から国民一般の常識まで、まさに実学の時代であったといっても過言ではない。1960年代以来、韓国の実学研究が盛んであった背景には、丸山真男の影響もある。丸山が荻生徂徠に近代の兆しを見出した如く、韓国学界では実学思想のなかに「先取りした近代」を見出そうとしたわけである（資本主義萌芽論）。ところが、丸山の学説に対して日本でも多くの批判が始まっているように、韓国学界でも実学の实在性を問題視する研究がなされている²¹。

朝鮮時代後期の新しい学風を「実学」として命名し、アカデミズムのなかで言説を形成したのは、20世紀の「国学」である。「実学」は概念の自明性を確保できないまま、ただ知識と理念により構成された20世紀の学術概念である。端的に、民族意識と近代意識の産物である。より極端な言い方をすれば、20世紀のナショナリズムの要求から考案された装置であり、虚構により造られた言説に過ぎない。すべては「実学」を実体化してしまった、20世紀の「国学」への批判の声である。

しかし、1930年代に朝鮮学運動を担っていた人々は、「実学」概念を共有しつつ、朝鮮時代後期の特定の学者たちを系譜化し、その学問的な価値を高く評価していたが、厳密に言って、それを「実学」と定めることはなかった。このことに注意したい。

18世紀を頂点にして発達した実学の内容は、「経世致用」・「利用厚生」・「実事求是」という標語を掲げながら多岐にわたって展開した。この点、実学思想の核心としてよくあげられるのだが、別の言い方をすれば、それぞれの系譜や分野で各々異なる実学を試みたともいえる。実際、実学者としてあげられている人物間の交流や学的ネットワークなどはそれ

²⁰ 千寛宇「韓国実学思想史」（高麗大学校民族文化研究所編『韓国文化史大系』6、高麗大学校民族文化研究所、1970）。李佑成「実学研究序説」（歴史学会編『実学研究入門』ソウル：一潮閣、1973）。

²¹ 研究史のなかで実学の概念そのものを問題にするものは多数あるが、最近の研究として、盧官汎「近代初期の実学の存在論——実学認識の方向転換のために」（『歴史批評』122号、歴史問題研究所、2018）をあげておく。

ほど強くなかった。しかも大体の実学者は主流ではなく、脱落した周辺的存在であったり、名門出身であったりしながらも自ら離脱した人々であった。彼らの思想がいくら画期的な社会改革の性格をもっていたとはいえ、実質的に現実との接点はほとんどなかったのである。

後に丁若鏞にいたって集大成したものの、実学者に該当する人々の派閥（堂派）を考慮すると、主に南人出身、そして一部の少論派・老論派であった。そのため、早く崔南善チェナムソンの「朝鮮歴史講話」（1930）では、南人派だけを「実学派」とし、老論派に対しては「北学派」²²と別度に規定している。通説では、これが朝鮮時代後期の「実学」を発見した最初の文献だったというのが、「実学」という命名からして正確な理解ではない。崔南善は「新学风」や「実学の風」といっただけである。

また、鄭寅普が18世紀の類書『星湖僿説』（1929）の刊行にあたって、その序文で「依実求独の学」として一括りにしたのは、柳馨遠リョヒョンウォン（号は磻溪）・李瀾イイク（号は星湖）・丁若鏞チョンジェデウらの南人派（星湖学派）と陽明学者鄭齊斗（号は霞谷）らの少論派（江華学派）であった。先程の崔南善は、この鄭寅普の提示した範囲のなかで、少論派を外して南人派の大きな流れだけを「実学の風」と紹介したのである。

朝鮮学運動に携わった人々が共有していたのは、大まかにいって「実学の風」あるいは「实事求是」の精神に限る。文一平は、このように固有名詞としてあった「実学」を、「实事求是」の精神としてつなげようとした²³。つまり、「実学」の対象は、研究の段階別に拡張し、歴史的に再構成されてきた²⁴。そして「実学」への評価も、研究者により意見が分かれていた。1930年代の民族主義者（実証主義系列）は概ね実学の近代的価値を評価していた反面、社会主義者は古典としての実学は認めても、その中世的な性格を限界とし、現在の意味には懐疑的であった。

因みに、近代転換期の朝鮮において「実学」概念は、清朝末期の中国と明治期の日本との関係のなかで形成された面も無視できない²⁵。まず、清国で「西学」を至急に受け入れて国家を富強にすべきだとするなか、西洋学問の核心として「格致学」を意味する「実学」概念が、朝鮮に輸入された。また、明治日本では福沢諭吉の主導していた「実学」が繁盛していると、朝鮮に紹介された。「儒学伝統」と「西洋近代」といった二項対立では完全には捉え切れない多様な議論の可能性こそ、植民地朝鮮における思想の現場に見るべきだと強調したい。

²² 清の最新技術に肯定的だった洪大容、朴趾源、朴齊家などを指す。地域的にはソウル及び京畿、堂派的には老論系である。主に貿易の増大や商業の振興を主張した、彼らの考え方は、租税法と土地改革を筆頭として制度改革を図った、李瀾から丁若鏞へつながる南人系実学派とは区別される。なお、朴趾源（号は燕巖）を実学の流れに編入した過程については、金南伊「20世紀初中期、燕巖に対する探究と朝鮮学の地平」（『韓国実学研究』21号、韓国実学学会、2011）を参照。

²³ 崔南善の後にも、「現実学派」（白南雲）・「経済学派」（玄相允）・「実証学派」（洪以燮）などの異なる表現があったが、20世紀半ばに入り、「実学」の用語が浸透していった。金鎮均「実学研究の脈絡、その脈絡の外にある実学」（林煥澤編、前掲書）、431頁。

²⁴ 李俸珪「21世紀の実学研究の文法」（延世大学校国学研究院編『韓国実学史研究』1、ソウル：慧眼、2016）。

²⁵ 盧官汎「転換期の実学概念の歴史的的理解」（同『記憶の逆転——転換期の朝鮮思想史に対する新しい理解』ソウル：ソミョン出版、2016）。

そもそも「実学」とは固有名詞ではなく、「虚学」（虚文）ないし「偽学」に対峙する一般名詞であったことが、問題をより複雑にしている。儒学の伝統では詞章学に対して經学を意味するなど、時代と論者により様々な用法をもって、絶えず変遷を続けてきた。「実学」の定義や範囲が曖昧であるのみならず、それ自体、価値中立的ではない価値判断的な概念なのである。否、元より論争的な概念だったからこそ、有用性をもっていたともいえる。

要するに、今までの実学研究は学問の実践問題であった。現代の課題を意図的に過去の世界に投影し、そこに「民族」と「近代」を探ろうとした切実な努力の結果であったといえよう。従来の実学研究を否定するつもりはない。ただし、それは朝鮮後期思想史ではなく、あくまで韓国近代思想史の中で論じられるべきであることを忘れてはならない。近代思想史における重要な歴史的軌跡として実学思想の位相を見定めたわけである。

今の実学研究は、「近代志向」から「近代省察」に方向性を変え、21世紀の「新実学」を提案する段階に来ている。前述の林熒澤は、1990年代以来の韓国における実学研究を導いてきた一人だが、21世紀に応じた現代思想として、新しい実学研究の必要性を力説している代表者でもある²⁶。彼は、実学が近代の学術運動によって創られた概念であることは認めた上で、それ以降の展開において歴史的意義をもつようになったと説明している。そして、21世紀パラダイムの核心を「東アジア」と「新実学」に見る。「新実学」が従来の実学研究への反省を込めた新たな角度からの研究、すなわち「東アジア」に視野を広げるための提言であることははっきりしており、それには十分賛同するとしても、近代克服の研究が依然として実学にこだわるべき理由はどこにあるのか。前述の宮嶋博史が日本国学と朝鮮学の比較研究を試みるなかで、宗教性の問題に言及したのも、同じ脈絡からであったと思われる。実学を性理学（朱子学）のなかでどう位置づけるかを含め、さらに衛正斥邪運動（儒教の守護）、東学農民運動（後に天道教と改編）などの宗教思想まで幅広く考える必要があるだろう。

「実学」概念が確定していないにもかかわらず（だからこそ？）、それをめぐる議論は現在進行形である。一時期は、日本と中国でもこの概念を受容し、独自の「実学」を発見したり、さらには東アジア「実学」研究のために相互連帯したりもしていた。今、それに加わっている研究者が少数派に過ぎないことが、もはや研究の有効性が期限切れであることを自ずと語っているのかも知れない。

今日の日本で「実学」というと、それは実証的・合理的に証明することができ、実生活に役立つ学問であるという程度の意味である。こうした「実学」概念の原型を与えたのは、周知のように、福沢諭吉の唱えた「實業之学」である。そして、この福沢の「実学」を「革命的転回」として高く評価しながら現代に再発見したのは、丸山真男であった。福沢と丸山の「実学」概念に賛同する研究が科学史分野を中心に継承され、日本の実学研究では大きな流れを形成している。

²⁶ 林熒澤『21世紀に実学を読む』（ソウル：ハンギル社、2014）、同『韓国学の東アジア的地平』（ソウル：創批、2014）。

その一方で、丸山に対する反論として出された、源了円の実学研究がある²⁷。丸山が福沢に見た実学の転回とは、日本思想史において朱子学が崩壊した結果として獲得した近代だが、源の説は、日本の朱子学こそが近代を準備していたのだ、という。源の描いた日本実学の系譜は、三浦梅園・山片蟠桃らの開明思想家から佐久間象山・横井小楠・吉田松陰らの幕末の思想を通底するものである。実学を統一概念として把握し、維新遂行の母胎をなした遠因を解明することで、維新史の新解釈を意図したのである。

源了円の跡を継いで実学研究の代表論者として積極的に発言してきた小川晴久も、「近代実学」にはない「近世実学」の特徴を探ることを研究の目的とする²⁸。そこで招集された江戸時代の思想家は、貝原益軒・熊沢蕃山・宮崎安貞・石田梅岩・安藤昌益・三浦梅園・山片蟠桃・大蔵永常・二宮尊徳・渡辺崋山・横井小楠などである。小川は、近世実学の再評価に留まらず、東アジア実学研究に向けて、王陽明の実心実学性を強調し、同時代の朝鮮と日本の学者たちを結びつけている。一部の韓国の日本思想史研究者が、それに応える形で、東アジア実学の共同研究が試みられてきたわけだが、今は継続されていないようである。

東アジア実学をめぐる共同研究は、現在、行き詰まっている。筆者は、そのことに懐疑的な立場であると別稿で述べた²⁹。それでも、前近代から近代への移行期、学問の在り方が本質的に転換する時点に関心をもっている筆者にとって、やはり実学は一つの手がかりになり得るかも知れないと考えている。それは実学という概念の有効性や東アジアへの波及性などを意識しているわけではない。より広い意味で、17～19世紀の東アジアに興った新しい学風として実学を捉えたい。個別にあった異質的な思想潮流を一緒にしてしまうのではなく、当事者に即して知の在り方、知のネットワークを当時の具体的な文脈に戻して考えたい。それなら、なお再検討の余地があると思われる。

もはや全地球的に単一な近代を想定する信念は揺らぎ始めている。今は、代案の近代、もしくは近代以後の想像力が求められる時点である。問題を指摘するのは簡単だが、その先を切り開くのは難しい。

4、一国史観を超えた「国学」研究の可能性——研究の課題

従来の韓国「国学」、すなわち20世紀の「朝鮮学」に対し、21世紀の「国学」は通常「韓国学」と呼ばれている。そこで「国学」と「韓国学」との差異を強調する意味で、一貫して「自国学」という語を用いる場合もある。恐らく「国学」というだけで、どうしてもイデオロギー的な理解を含意するからであろう。

²⁷ 源了円『実学思想の系譜』（講談社、1986〔『徳川合理思想の系譜』中公叢書、1972〕）、同『近世初期実学思想の研究』（双文社出版、1980）、源了円・末中哲夫編『日中実学史研究』（思文閣出版、1991）。

²⁸ 小川晴久『朝鮮実学と日本』（花伝社、1994〔河宇鳳訳、ソウル：ハンウル、1995〕）、小川晴久編『実心実学の発見——いま甦る江戸期の思想』（論創社、2006）。

²⁹ 斐寛紋「近代転換期における日本の実学——山片蟠桃と福沢諭吉」（『日本思想』29号、韓国日本思想史学会、2015）。

「朝鮮学」という語を最初に使ったのは、朝鮮初の雑誌『少年』を創刊し、また朝鮮光文会を設けて出版・文化事業を展開した、文学者かつジャーナリストの崔南善だった。彼は、1920年代から「朝鮮人の手により朝鮮学を立てる」ことを宣言したが³⁰、しかし「朝鮮学」研究者が皆その用語を好んで使ったわけではない。

たとえば、国史学者の安在鴻の場合、朝鮮学の意味を狭く捉えずに学問の領域を超えて世界史への展望をもつべきだと主張した。彼が朝鮮学運動の課題としたのは、「民族をもって世界へ、世界をもって民族へ」といった民族的国際主義・国際的民族主義であった。いわゆる「民世主義」である。自分の号「民世」の意味についても、民衆の世界から民族の独自性はもちろん、世界史の普遍性へ拡大できる、といった方向性を含意したものであると説かれた。すなわち「民世主義」は、資本主義と社会主義の抱えている矛盾を弁証法的に止揚し、朝鮮史の向かうべき道を明らかにしたのである。彼は丁若鏞を「国家的社会主義者」と定義した上で、「産業的民主主義」・「経済的民主主義」・「経済均等」などの語も頻繁に用いている。つまり、「国学」としての朝鮮学がもっている排他性や偏狭性について、当時から既に警戒の視線が存在したのである。

崔南善の朝鮮学宣言を受けた具体的な著述として特記されるのは、^{アンファク}安廓の『朝鮮文学史』（1922）と『朝鮮文明史』（1923）である。彼ら日本留学生を中心に1920年代から提起された「国学」は、人類と世界に照応する普遍的価値を朝鮮民族に確認することであり、人類と世界の普遍的文化に朝鮮民族がどれほど寄与したかを解き明かすことでもあった。彼らの「国学」理論は、国家喪失という時代の当為によって成り立つものであった。が、彼らは「朝鮮人」である前に、「世界人」であり「普遍人」であるという。「国学」の最も支配的な方針は「普遍性の独自の具現」（普遍性の内面化）であった。それだけに、彼らにとって植民地現実の克服という課題は徐々に弱くなっていく面もある³¹。

以上は、国学をはじめとする日本思想史研究の問題にも通じるものがあると思われる。では、東アジアを射程に入れた国学研究の見込みはどうだろう。前述の李鎔範のいう「植民地国学」を例にすると、朝鮮学との比較のため、18世紀日本の国学ではなく、それを「日本文献学」として発見した芳賀矢一・上田万年・久松潜一などの19世紀末から20世紀初の「(新)国学」を対象にしている。林煥澤の試みた東アジア国学でも、朝鮮学と比較したのは、1900年代の中国において国学運動を先導した章炳麟・胡適から、1930年代に刊行された錢穆『国学概論』などであった。同じく20世紀に登場した近代学術として、「新学」と「旧学」が交替するなかで国学が提起されたこと、その点を踏まえて東アジア国学の類似性と相違性を言い出したのである。

東アジアの国学を比較する前に、まずは細かい線引きが肝要ではないか。日本においても先程の「近世実学」と「近代実学」同様、「近世国学」と「近代国学」といった語を用いる場合がある。個人的には「近代国学」という用語に反対する立場だが、厳格な時代区分がなされていることを断っておきたい。1890年代、国文学の成立期において国学を

³⁰ 崔南善「朝鮮歴史通俗講話」（1922）、『六堂崔南善全集』2（ソウル：玄岩社、1974）、410頁。

³¹ 柳浚弼「自国学の理念と『朝鮮文学史』——崔南善と安廓」（同『東アジアの自国学と自国文学史に対する認識』ソウル：ソミョン出版、2013）。

伝統として持ち出す営みについては別稿で触れたことがあるため³²、ここでは省略する。本居宣長をはじめとする近世国学と近代日本のナショナリズムとは、そのままではつながらないことを検証する作業だった。

一般に国学のイデオロギーは自民族中心主義を含んでおり、「日本的なもの」や「朝鮮的なもの」などといった自国の特殊性を求めた点を、その生まれながらの限界としてきた。しかしながら、そうした従来の国学認識から再考を要するのではないか。そうしない限り、近年の中国や韓国における国学復活の現象に対し、本質を見極めずに正しい判断のできない恐れがある。

さて、以上の趣旨からはやや遠くなるが、18世紀の東アジアにおける知の在り方に関連して、ただいま投稿中の論考を少し紹介することで終わりにしたい³³。それは「類書」の伝統から「百科全書」への出版の流れ、すなわち博物学的な知がいかに集成・分類・伝達されたかという問題である。たとえば、『三才図会』（1609）の日本版『和漢三才図会』（1713）は、18～19世紀の朝鮮において「百科全書派」と呼ばれる実学者に愛用された。もちろん影響力の範囲や信頼度などの面では『三才図会』には及ばなかったものの、日本の類書が朝鮮の知識人に一定の影響を及ぼした事例である。

百科全書派の中心は、実学者李瀾の門下である星湖学派であった³⁴。彼らを触発させたのは、明清交代期の新学問、とりわけ漢訳された西洋学術書であった。実際、知の広がりには、ソウルとその周辺地域の知識人に限られているが、彼らは日本の書物にも多大な関心を示していた。百科全書派のなかでも名物考証の博物学者と知られる李徳懋イドンムのネットワークが注目される。彼は、社会的に冷遇されていた庶類出身で、朝鮮通信使に参加していた庶類層の知識人と親しい文友であった。朝鮮通信使を通じて伝わった『和漢三才図会』も、このネットワークのなかで閲覧されていたのであろうと推定される。

また、20世紀朝鮮の類書を代表する張志淵チャンジヨンの『万国事物紀原歴史』（1909）は、西村茂樹の『西国事物紀原』（1879）に倣っている。が、部門と項目の構成からしてかなり異なった体制を採っている。張志淵が中国及び朝鮮の典籍を合わせて活用しているためである。『皇城新聞』の主筆を務めていた張志淵は、20世紀の朝鮮学運動が本格化する前に、丁若鏞を「経済先生」として、最初に広く世に知らせた人物でもある³⁵。彼は、1900年に広文社を設立すると、まず丁若鏞の主著『牧民心書』と『欽々新書』の活字出版に取りかかって、1902年に刊行した。続いて1903年には丁若鏞の『我邦疆域考』を自ら校訂増補した

³² 襄寛紋「国学から国文学へという伝統——皇国日本と本居宣長」（『日本研究』16号、高麗大学校日本研究センター、2011）、同「国文学の誕生と国学——学制とテキスト選定を中心に」（『日本学報』98号、韓国日本学会、2014）。

³³ 襄寛紋「東アジアにおける博物学的知識の流通と「実学」」（現在、査読中）。

³⁴ 李瀾の著した類書『星湖僿説』（1740）は全30巻30冊で3007項目から成るが、この書物は弟子の安鼎福が小註を付して改編した『星湖僿説類選』（1780年代）により普及した。

³⁵ 『皇城新聞』1899年4月17～18日の論説「我国の経済学大先生、丁茶山若鏞氏の所術したところを摘要す」、同年8月4～5日の論説「大韓経済先生、丁茶山若鏞氏の所撰した守令考績法を左に略記す」。この点については、慎鏞廈「19世紀末、張志淵の茶山丁若鏞の発掘」（『韓国学報』29号、一志社、2003）、金鎮均「近代啓蒙期（1894～1910）における茶山の呼出」（『茶山と現代』45号、延世大学校康津茶山実学研究院、2012）を参照。

『大韓疆域考』二冊を刊行、それを基に1907年には『大韓新地誌』二冊を刊行した。彼の学術を端的でいえば、博学と多作となる。彼の学問と思想には「実学」志向の性格が顕著である³⁶。そして彼の「経世史学」は孤立した思想ではなく、地理領土の方面は申采浩^{シンチェホ}へ、文化風俗の方面は文一平へと民族主義歴史学者たちに継承されている。

そのうち文一平は、1933年に『朝鮮日報』の編集顧問になってから、ジャーナリズムによる歴史の大衆化に努めた。歴史の学術研究より、歴史的知識の普及に力を注いだため、朝鮮の自然・事跡・芸術・風俗に至るまで、分野を問わずに朝鮮学の対象とした。当時、大体の民族史学者が朝鮮史の長所だけを探し求めて民族精神を高めようとしたのに対し、彼は朝鮮民族史の反省的省察に重きを置いた。したがって、彼の歴史研究が凝縮された「朝鮮心」の発掘は、抽象的な観念論に留まらない現実性を強く帯びている。「朝鮮心」の結晶はハングルであり、また「実学」に見られる「実事求是」の精神は、自我の再樹立という意味で「朝鮮心」の再現とされた。

ここで本居宣長に話を戻してみると、実は、彼の博学趣味は有名である。その点に関して、『古事記伝』執筆の知られざる意図として百科事典を作る考えがあったとする研究がある。本居宣長記念館館長の吉田悦之がかつて提起した視点だが³⁷、それ以降、あまり進められていない。吉田によると、『古事記伝』には『古事記』と直接かかわらないことまで執拗に考証して延々と説明するところがあり、それは『古事記伝』中に『古事記』時代のもを全部書き記そうとした構想があったからだ、という。小著の終章で述べていたのも、その解釈と通じるものがあり、次に引いておく。

宣長は、天皇の統治につながる「神の道」を「人の道」に適用して読もうとした。「皇国の道」は、何よりも「人の情」に適うが故に、正しい「真の道」として高められたことに注意すべきである。それは人間世界の総体を問うものであり、必ずしも「天皇の天下しろしめす道」にかかわる政治思想の問題には還元できないものとしてある。『古事記伝』において「皇国」とかかわって述べられている上古の「事」は、神代からの具体的な「風儀」「礼儀」「制」などを指している。それは皇室をはじめ、民間にまで及ぶ風習的なものを総括したものである³⁸。

これ以上、論を発展させることはできなかったが、今後のヒントとして考えていきたい。吉田の指摘するように、宣長は『玉勝間』で日本版百科事典の編纂を後世の人に託したこともあるが、自ら編纂の夢を諦めずに死ぬ直前まで『鈴屋新撰名目目録』を起稿している。また、『古事記伝』には簡単な索引（宣長死後、息子の春庭が作成したもの）がついており、検索に非常に便利である。確かに『古事記伝』を一種の百科事典の如く、必要な

³⁶ 盧官汎『大韓帝国期における朴殷植と張志淵の自強思想研究』（ソウル大学校国史学科博士論文、2007）。柳浚弼「大韓帝国期における教育制度の構想と「実学」——張志淵の事例」（同、前掲書）。

³⁷ 吉田悦之『『古事記伝』の拾い読み——未知探求の百科事典』（松坂十楽、2002）、同『本居宣長——日本人のこころの言葉』（創元社、2015）、同『宣長にまねぶ』（致知出版社、2017）。

³⁸ 裴寛紋、前掲書、191頁。

ところだけを抜粋して読むことが可能なのだ。吉田は、一言で「学問の情報化」に成功した最初の人として宣長を位置づけるのであり（宣長の時代から日本版百科全書派の時代へ入っていく）、ちょうど同時期のフランスで引き起こされた百科全書派の営みとパラレルにあった現象と見る。すなわち 18 世紀後半、近世日本における百科事典的な知の流行は、庶民意識を大きく変えて明治維新にもつながっていき、知識が庶民のものになっていく時に社会を変革する原動力となる、という。このように爆発的な「知識の洪水」現象は、自分の住む場所・歴史・社会への強い関心から起因するものと理解できる。こうして考えると、「皇国」は近代の皇国ナショナリズムにつなげる前に、近世庶民のアイデンティティとして生まれた、近世固有のものとするべきであろう。

5、結びに代えて——研究の展望

現在、韓国有数の大学には、ほぼ例外なく、国学（韓国学）関連の付設研究所がある³⁹。これらの大学付設研究所は、地域学に属する概念としての韓国学を標榜しているものの、研究の中心はやはり伝統の国学（国文学・国史学）にある。大学の学科編制では各専攻領域に分かれて国学の位相が不明だが、研究機構のなかでは相当の比重をもって、それなりに活性化してきたといえる。とくに 2000 年代、世界化に対応すべき学術戦略として韓国学を起こさねばならないという声が上がっていき、政府でも長期的・重点的支援分野として認められた。そこで 1990 年代からの古典国訳本 CD-ROM 化は弾力を受け、一次資料のデジタル化が急速度で進行した結果、古典関係データベース構築及び公開サービスはかなり整った状況である。この時期から「国学」の代わりに「韓国学」という概念が通用するようになる（逆に「国学」の語が復活する例もないわけではない）。国学といい、韓国学といい、東アジア学といい、いずれにせよ、それは恐らく固定した学問を指すのではなく、学問の実践的な方法論を示し出す戦略に違いない。

今の時代の学問がどうあるべきかは、当然、今の我々に必要な研究が何であるかを問うものであろう。韓国における国学研究の動向が日本の国学研究に示唆を与える点があるかどうかは正直よく分からない。日本思想史も韓国思想史も、たかだか百年前に成立した学問であり、なにより学問の目的意識が自明であった時代の課題として誕生したものである。それが国学の名を冠する以上、国家のためにという方向から自由になることはできなかったが、その呪縛から解き放たれたい。

³⁹ 朝鮮学運動から引き継がれる延世大学校国学研究院（1948年に東方学研究所を発足、1977年に国学研究院に改編）、高麗大学校民族文化研究院（1957年に韓国古典国訳委員会を発足、1963年に民族文化研究所に改編、1997年に院に昇格）。また、朝鮮時代の王立学術機関から起源をもつソウル大学校奎章閣韓国学研究院（1961年に東亜文化研究所を発足、2006年に韓国文化研究所と奎章閣を統合）、成均館大学校東アジア学術院（1958年に大東文化研究院を発足、2000年に改編）。なお、大学ではないが、韓国学中央研究院（1978年に財団法人韓国精神文化研究院を発足、1980年に韓国学大学院を開校、2005年に改称）もあり、安東にある韓国国学振興院（1995年に設立）は2000年から儒教文化に関する総合情報データベース構築事業を開始している。